

# 「大谷本願寺通紀」について

藤 島 達 朗\*

Chronicle of the Ōtani Honganji Temple

—Ōtani Hongangi Tsūki—

Tatsuro FUJISHIMA

(1974年9月30日受理)

## 1. はじめに

親鸞(1173—1262)を宗祖とする浄土真宗に於ける歴史的反省及びその述作は、本願寺三世覚如(1270—1351)による宗祖親鸞の伝記研究(「報恩講私記」,「親鸞伝絵」,「口伝鈔」等)にはじまり、8世蓮如(1415—1499)の生涯を、その子実悟(1492—1583)によって回顧記録されたことがこれにつき、つづいて蓮如の孫顕誓(1499—1570)により、永禄11年(1568)「反古裏書」が撰せられて、ここにはじめて通史的述作を得た。もっともこれは本願寺の歴史が中心で、8世蓮如、9世実如(1458—1525)10世証如(1516—1554)11世顕如(1543—1592)に、やや詳細ではあるが、全体として簡略、本格的な編述とはなしがたい。江戸時代に入ってその正徳5年(1715)良空(1669—1733)によって「高田開山親鸞聖人伝」が著わされ、伝として一応完成されたものが、はじめてここに出現した。世の泰平とともに信徒の旧跡巡礼が盛んとなり、その機運にうながされて、祖伝研究の一斑としての遺跡研究が盛んとなり、「摺聚抄」(1700刊)、「遺徳法輪集」(1711刊)等を筆頭に、いわゆる「廿四輩記」類が続出したが、これは玄智(1734—1794)編、明和8年(1771)刊の「大谷遺蹟録」で極まった。以上の如き風潮のもとに、祖伝、寺伝をふくむ真宗の通史が、全書的なかたちを以て成就されたのが「大谷本願寺通紀」である。真宗に関する歴史的研究は、明治以前に於て、これに極まるというべきであるが、以下述べる如き事情で、完全に刊行せられず、小異をもつ幾種類かの写本として伝えられ、漸く明治45年の「大日本佛教全書」、大正3年の「真宗全書」中にて、それぞれ活字化された。写本の異動は、それらを底本としたこの二本に直にあらわれている。特にひろく普及している「大日本仏教全書」本(以下「仏全本」という)が、未整理のままである稿本を以てしているので、完成本である「真宗全書」本(以下「真全本」という)其他と比較して、その書誌学的な開明を施こそうというのである。

## 2. 著者と本書の成立について

著者は本願寺派(西本願寺)京都西六条慶證寺第七世玄智である。字は景耀、曇華室と号した。享保19年(1734)河内国岡村(現枚方市内)の大谷派(東本願寺)願宗寺種哲の息として生れ、12、3才で西本願寺の学匠僧樸(1719—1762)の門に入り、やがてその推挙によって、慶證寺玄誓の嗣となった。慶證寺は本山の堂職であったので、宝暦9年(1759)玄誓が没すると、直に本山に出仕、出ては各地の別院輪番等を歴任し、その間宗

\* 史学研究室

門に於ける旧事，史的研究のとぼしいことを遺憾として，これが攻究につとめた。明和2年(1765)には「浄土真宗七高僧伝」が成り，安永3年(1774)には早くも力篇「考信録」が完成している。同7年(1778)には「浄土真宗教典志」を集め，天明3年(1783)には「祖門旧事紀」を出し，同4年には，さきにふれた良空の「親鸞聖人正統伝」の駁論「非正統伝」を著わしている。この間安永3年より4年にわたり所謂宗名事件(浄土真宗を一向宗という俗称を以て扱われることの訂正を幕府に訴える)に関与し，そのための著述(蕩寇策，逐躰策)も行なっている。

本書については，巻2及巻4の奥書によれば，安永8年(1779)，紀州鷺森別院にあるとき，さきに完成した「真宗七祖伝」につき，親鸞，覚如，蓮如，の三師伝を草していたところ，天明4年(1784)正月，本山の実録の編修を命ぜられた。そこでこの三祖伝を本として，翌5年「歴世宗主伝」4巻を完成した。これは同8年に公刊したが(「大谷宗主伝」，「大谷諸宗主伝」，「大谷本願寺宗主伝」「通紀浄土真宗大谷宗主伝」の四種の刊本がある)，以後これにつづけて「傍附諸伝」「支派諸伝」「諸弟略伝」「廟堂規制」「法物品数」「別院縁由」「法事例式」「公私文書」「僧階次序」「諸山綱略」「吉水門裔」の十二類十五巻を寛政3年(1791)に成稿したという。なお先の新刊の「宗主伝」は，天明8年(1788)新門主文如(西本願寺18世)に献ぜられたが，翌寛政元年に命下ってその流布をとどめしめられた。そしてそれと前後してその職も免ぜられている。この間の事情は明かでないが，恐らく「宗主伝」中の記事が忌諱にふれたのであろう。少なくとも東西分派に関する筆致は，問題になるものをふくんでいる。本書が全巻の公刊をみなかったのも，この事実が関係していると考えられるのである。

このことあってより一転，筆を宗史研究より教理の方面にむけ，一宗の根本書である親鸞の主著「教行信証」の註釈に力をつくし，寛政4年(1792)に至って「教行信証光融録」40巻を大成した。考証該博，義理透徹，同書註釈中の白眉と称されている。そして同6年10月，61才を以て歿したのであった。後嗣全からず，生涯の述作23部101巻，多く散逸して伝わらず，梓行現流するものそのうちの十数部にすぎない状況である。

### 3. 諸本の概要

本書の写本には，まず自筆校本と考えられるものが龍谷大学図書館にある。これはもと門主の文庫であった写字台文庫に伝えられていたもので，「真全本」はこれを以て底本としている。十二類，十五冊よりなり，最も整った形態をもっている。なお龍大図書館は今一本蔵し，それは十二冊に調巻されており，「仏全本」はこれを底本としている。ところがその内容は別掲の如く巻序，篇目が整わず，いささか混乱し，前後一貫しない。即ち「浄土真宗大谷伝灯傍附伝」と「吉水門下分流」の2篇は巻次を欠き，「諸弟略伝」「仏事諸式」は，場所を異にして共に巻7となし，「廟堂規制」「公私文書」「諸弟略伝近世学侶部」は，別にそれぞれ巻8とする。そして「別院縁由」「諸山綱略」も同様なかたちでともに巻10としている。同じく別掲の東京大学本，大谷大学本がそれぞれ十巻に，旧写字台文庫本即ち真全本が十五巻に調巻され，一応巻序整備されているのに比せば，いかにも無雑作に順序を考えずまとめられたからである。恐らくは撰者歿後，慶證寺よりその稿本を前後なく，一括して学林文庫(現龍大図書館)に納入された，それをそのまま調巻して伝えられたのであろう。このことは撰者の自筆本が十五巻本として，写字台文庫に存在していたことで知られる。それは撰者の献納にかかると考えられるからである。

この外写本としては，さきにふれた東京大学，大谷大学以外に西尾市立岩瀬文庫，お茶

の水図書館成篋堂文庫，天理大学にそれぞれ蔵されている。これらのうちで主となるものは，東京大学本，大谷大学本であり，それぞれ十巻本である。以下この二本とさきの「仏全本」，「真全本」を表示すれば次の如くである。

○諸第略伝近世学侶部 大谷本願寺通紀卷第八 (第一三冊)	○諸山綱略 大谷本願寺通紀卷一〇 (第二二冊)	○吉水門下支流 (第一一冊)	○旁門略伝 大谷本願寺通紀卷六 (第一〇巻)	○僧階次序 大谷本願寺通紀卷九 (第九冊)	○別院縁由 大谷本願寺通紀卷之一〇 (第八冊)	○法宝品教卷之九	○公私文書 大谷本願寺通紀卷八 (第七冊)	○仏事諸式 大谷本願寺通紀卷七 (第六冊)	○廟堂規制 大谷本願寺通紀卷之八 (第五冊)	○諸弟略伝 大谷本願寺通紀卷之七	○浄土真宗大谷伝灯旁附伝 (第四冊)	○歴世宗主伝 大谷本願寺通紀卷第三 (第三冊)	○歴世宗主伝 大谷本願寺通紀卷第二 (第二冊)	○歴世宗主伝 大谷本願寺通紀卷第一 (第一冊)
○吉水門下支流 卷一〇	○諸山綱略 卷一〇	○僧階次序 卷九	○公私文書 卷八	○仏事諸式 卷七	○旁門略伝 卷六	○宗主旁附伝 卷五	○殿堂別院記 卷四	○同左 卷三	○同左 卷二	○歴世宗主伝 卷一	○殿堂別院記 卷四	○同左 卷三	○同左 卷二	○歴世宗主伝 卷一
○吉水門下支流 卷一〇	○諸山綱略 卷一〇	○僧階次序 卷九	○公私文書 卷八	○仏事諸式 卷七	○旁門略伝 卷六	○歴世宗主法胄諸伝 卷五	○別院縁由 大谷廟填 靈宝品教 卷四	○諸弟略伝 宗祖親弟部 卷七	○諸弟略伝 近世学侶部 卷八	○諸弟略伝 宗祖親弟部 卷七	○殿堂宮構 法胄諸伝 卷五	○諸弟略伝 宗祖親弟部 卷三	○同左 卷二	○歴世宗主伝 卷一
○吉水門下支流 卷一五	○諸山綱略 卷一四	○僧階次序 卷一三	○公私文書 卷一二	○法事諸式 卷一一	○別院縁由 卷一〇	○大谷廟填 靈宝品教 卷九	○諸弟略伝 近世学侶部 卷八	○諸弟略伝 宗祖親弟部 卷七	○諸弟略伝 近世学侶部 卷八	○諸弟略伝 宗祖親弟部 卷七	○旁門略伝 卷六	○同左 卷四	○同左 卷三	○歴世宗主伝 卷一

以上のうち、「仏全本」は10巻と数えられ，同書刊行時の月報には，13冊とするが，底本となった龍大本は12冊であり，その最後の「諸弟略伝近世学侶部」巻8の1冊は存在しない。思うに龍大本12冊に「仏全本」編集の際，自筆本の「近世学侶部」巻8を加えて13冊としたのであろう。巻8とあることがこれを証する。

さて四本比較すれば，まず最初に順序だてられたのが東大本であり，ついで谷大本，そして一応最後のものとして出来上がったのが，「真全本」即ち旧写字台文庫本であることがわかる。つまり東大本では，「諸弟略伝」が存在せず，「廟堂規制」と「別院縁由」とが合して殿堂別院記として一巻とされている。谷大本は「真全本」に近いが，第3巻に巻

の字のみあって3の字をみない。また「近世学侶部」に巻8とある。この巻8は、明かに「真全本」の巻8で、あとから「親弟部」の次に加えられたものであろう。従って谷大本が10巻として順序だてられたその時には、これは入っていないかと考えられる。

以上の如くにして「仏全本」は、それらの素材となった各章が、順序なくまとめられたとせねばならないし、最後の「近世学侶部」は底本にはないが、その存在をみとめて、「巻8」の数と共に、「真全本」或は谷大本より、「仏全本」編集の際に転載挿入されたと思われるのである。

#### 4. 内 容

その内容を「真全本」によって略説すれば次の如くである。巻1より巻4までの「宗主伝」は、宗祖親鸞より17世法如までの各伝歴並びにその子孫を記し、僅かに新門主文如にふれている。法如の項に於いて「仏全本」には十数頁の脱落がある。「旁附法内諸伝」では親鸞の末女で、本願寺の原づく本廟の創立者である覚信尼以下善鸞、覚恵、唯善、存覚等より第16世満如の弟静如に至る世代に入らぬが重要な存在である16人の略伝をのせ、「旁門略伝」は、西本願寺以外の真宗諸本山の略述であり、「諸弟略伝親弟部」は、親鸞の直弟子と考えられる39人について述べ、加えて消息等にみえるもの、其他所謂六老僧、関東七ヶ寺、そして廿四輩等の名位をつらねる。なおこのあとに甲斐万福寺本の「門侶交名帳」をのせるが、周知の如くこれは現に万福寺に存在せず、本書によってのみこれをみることが出来るもの、ところがこれを「仏全本」はのせていないのである。「近世学侶部」は、本願寺派における近世の学僧河内光善寺准玄以下27人の略歴、それに奇跡伝2人、祥異伝1人、法寇1人の各伝と、下間家系図を附載する。次の「廟堂當構、靈宝品数、大谷廟墳」で、その中の「廟堂當構」と「大谷廟墳」は、「仏全本」では「廟堂規制」となっており、本寺の諸堂や大谷の祖廟の沿革と現状を略述する。そして「靈宝品数」は「仏全本」では「法宝品数」となっており、親鸞の根本画像である鏡御影、安城御影以下の法宝の目録とその略解である。「別院縁由」では、西山、北山、津村、堺、鷺森、築地、吉崎等の諸別院について述べ、「法事諸式」で、本願寺における仏事法要の次第を記し、「公私文書」は、宗祖以下歴代の公私の文書を採録する。その最初に親鸞の「いや女讓状」があげられるが、正しいものは異本云としてあとにあげ、本文は「ユツリワタスコト」と標し、祖師真像を覚信尼に附属するの書とこれを改筆曲解している。次の「僧階次序」は、寺格、堂班、僧位等の説明である。「諸山綱略」は、当時行われていた大徳寺某僧の著述をもととして、東大、興福以下21本寺、三論宗以下16宗、諸門跡、比丘尼御所等の沿革を略説したもの。最後の「吉水門下支流」は、法然門下の支流として、大谷、西山、鎮西、長楽寺、九品寺の五流をあげるとともに、聖覚、信空以下の門下諸弟子の略伝と、「七箇条制誡」の署名をのせている。順序としてはこれと前の諸山綱略とが入れかわった方がよいと考えられる。

以上、本書は直接間接に本願寺に関する万般の事実が網羅されており、全体をもって通史的な意義を果たすが、むしろ全書的存在となすべきであろう。考証は大凡該博にして綿密で、近世における宗門最高の雄篇である。もとより今日に於ては、種々議せられるものなしとしないが、以来今日まで真宗史研究の基礎的な文献として、斯学の発展に大きく寄与した点は認められねばならぬ。ただ本書の成立が前述の如くであるため、諸本における章節の配分、叙述の多少、字句の異動等一々あげるにたえない。即ち一応完成本である「真全本」により、なお諸本を常にこれに参照する必要があると考えられるのである。

## 註

## ○卷2，奥書

安永八年己亥三月，始草高祖及覺蓮二師傅以繼真宗七祖傳之後，經五年天明四年甲辰閏正月廿二日，承命撰纂本山実録，因原於旧纂撰大谷歴世宗主傳四卷，以為其本，五年乙己八月五日卒業，七年丁未九月十三日官府許録銀弘通，八年戊申十一月以來校刻，次第就緒，聊著傳灯功烈，以擬報德一端爾

九年巳酉正月七日洛都慶證寺玄智景耀謹識

## ○卷四ノ奥

吾門乏紀傳，旧事殆不可考，不肖嘗有憾于茲，躬不自揣，窃有撰纂之志，明和二年五月，撰真宗七祖傳三卷，刻之，安永八年三月草高祖及覺蓮二師傳，以統其後，天明四年閏正月二十二日，不図承編修本山実録之命，是博訪旧紀，集而大成，以旧纂為本，著大谷歴世宗主傳四卷，尋及旁附諸傳，支流諸傳，諸弟略傳，廟堂規制，法物品教，別院緣由，法事例式，公私文書，僧階次序，諸山綱略，吉水門裔諸部，類聚十二，卷分十五，合題大谷本願寺通紀，雖爾見聞狹隘漏闕尚多，冀有力之士，修之補之，以為一家之言焉

寛政三年辛亥七月

慶證寺玄智景耀識

## Summary

The compiler Genchi, affiliated to the Shinshu Honganji School, is the seventh patriarch of the Keishōji Temple, located at Nishi-roku-jo, Kyoto.

This chronicle is not merely the first history of its kind, but also entitled to an encyclopedia in a sense that it refers to various aspects and topics in a wide perspective. The original manuscript volumes are of the two kinds, the ten and the fifteen volumes. A part of the first chapter "Rekisei Sōshu Den" (History of the successive patriarchs) was once published, while the other parts are kept in manuscripts hitherto unpublished.

These Mss. volumes have been copied with various hands. The various copies are:

A—from the library of the Ryūkoku University. Published in the Dainihon-Bukkyo-Zensho, 1912.

B—from the library of the Rhūkoku University. Published in the Shinshū-Zensho, 1914.

C—from the University of Tokyo Library.

D—from the library of the Ōtani University.

Each Mss. is different with the date, being slightly modified with its system and content. Mss. A is a compilation of the incomplete Mss., and confused in chapters and sections.

In conclusion, at first the Mss. C has been compiled, followed by the Mss. D. The Mss. B, written by the author himself, has finally been brought to completion in a present form.